特集 わたしが願う21世紀

あえて「普通」・されど「改革」

松本　喜成
JAMサンデン労働組合

はじめに

この度、生活経済政策研究所から寄稿の依頼を受け、小生のような若輩者が来る21世紀について語るのは畏れ多いことですが、こうした機会を与えてくれたことに敬意を表し、思いの一端を述べさせて頂きます。

本題に入る前に、読者のご理解を賜る為にも若干小生の現況について触れさせて頂くことをご承知願いたいと思います。

社会人としてまだ15年の経過しかない未熟者であります。現勤務先入社後間もない頃、先輩の誘いもあって労働組合役員を志し、現在組合員3000名規模の責任者として様々なことを学ばせて頂いております。

小生自身思いますに、決して能力が高い訳でもなく紹介出来るほどの実績がある訳でもない、どこにでもいるようなごく平凡なサラリーマンであります。しかしながら職務がら政治や経済・金融、福祉から環境等を労働組合の立場から捉え、また所属する労働組合の組合員の中で起こる様々なトラブル処理等々の解決手法とその為の雑学全般を身につけるべく日夜励んでおります。

こうしたなか、昨今思う事に「この国は将来どの様になるのだろうか。自分達の子や孫の時代にはどうなってしまうのだろうか。自分の老後はどのようにしなければならないのだろうか。」など徒然なるままに思いがよぎることが日々増えますし、そう思うきっかけが仕事や日常生活のなかで非常に多くなっていると感じます。

誰しもが感じていることとは思いますが、そうした疑問の一端を問題提起させて頂きながら、スケールの大きな次世紀を考える事は非常に難しいものではありますが、20世紀を自分なりに捉えた上で、21世紀はどうあるべきなのかを述べさせて頂きます。

20世紀の課題

戦争と革命の世紀、科学と技術の世紀、大衆の世紀‥‥。

様々に形容されるされる20世紀が終了しました。長い人類史の中でも、20世紀最後の十年は、人間活動の広がりが、母なる地球さえ小さな星に変えてしまったことで記憶されることと思います。

冷戦終焉後のグローバル経済化、市場化、電子情報化は、旧来の権威や価値観を揺るがし、人々を困惑させていると考えます。

こうした中、20世紀末の日本は二つの崩壊に直撃されました。政治・軍事面での冷戦体制の崩壊と経済面での巨大バブルの崩壊であります。戦争の廃虚から高度成長を経て経済大国日本が築き上げられました。それは多くの働く者の血と汗と努力の賜であり、更には国民が一丸となって豊かな生活を求めていたからこそ成し遂げる事が出来も

のと思います。しかし、ひたすら経済大国に突き進んだ日本は今や多くの制度疲労とゆがみの精算を迫るものとなってしまいました。わが国の政治と経済は、多くの重い宿題を抱え込んで21世紀に踏み出そうとしているのではないでしょうか。

新たな21世紀を私達はどう踏み出せばいいのか。人間の価値観の変更をも迫るほどの環境の変化を見つめ、世界的にそして日本として、私達の抱える課題を今こそ考える時期に来ていると思います。

21世紀の経済政策のあり方

20世紀、特に戦後日本の経済政策は経済を成長させるため、産業振興のための政策と労働力確保の政策とを区別して考え推進してきました。本来、両者は重なりあうものの、高度成長、生活水準・国民所得の向上が国是であった以上、効率性優先から別々の政策推進が選択されてきたと思います。

均等・画一的の時代から個と多様性が求められる時代となり、事業者・労働者の意識と行動スタイルが変革しているとき、経済政策のあり方も変容していく必要があります。

いかに技術や情報が発達しても、これを使える人がいなければ宝の持ち腐れであり、新たな発想・アイデアで新しい技術や情報を開発し発信する人がいなければ、成熟し多様化した社会の需要に応えてはいけないものであると考えます。突き詰めれば、未来の産業創造に必要な資源は、人の持つ「知識」と「技能」ではないでしょうか。

効果が見えにくい「人づくり」ですが、産業経済を動かすのが人である以上、人材を適切に評価し、市場の中で資源として適切に配分していくことが、産業の競争力を高めていくことに必要な事であると考えます。

あるべき社会の方向性

この間触れた通り、戦後日本は経済を中心に復興を成し遂げ、国民の総意であった生活の向上が実現できました。人々の暮らしは便利になり何不自由のない豊かな時代になりました。余談ですが、小生自身思いますに幼い頃TVマンガで見たヒロインが持っていた携帯通信機器を何時になったら自分達も使えるようになるかと夢に見たものでした。やがて30年が経過し、今や持っていない人の方が少ないと言われる程までになった携帯電話は人々に広く普及し、且つ大きな経済市場をも司るようになりました。電子技術の発達と共に消費者ニーズとそれを満たそうとする企業ニーズの一致がここに見られる訳ですが、一方でこうした従来生活の場になかったものが登場することによる新たな問題が発生する事も忘れてはならないと思います。

1999年の世相を表現する文字に「末」という字が選ばれたことは記憶に新しいですが、世も末と思わせるような人の心までもが荒んだ事件の道具にこうしたハイテク製品が利用されていたことは、21世紀を一方で不安な時代へと導いている象徴なのかもしれません。

21世紀は、精神的な成熟が求められる社会となり、個々人の働き方やライフスタイルに応じた社会のあり方、自由、公正性が保障された市場経済の中で、個人の責任が求めれる経済社会になっていくと考えます。

そしてやる気のある者、努力する者が報われ、その能力を最大限に発揮できる環境を整備する事で、21世紀に向かって活力ある経済社会を築いていく必要があります。

成熟とは、本当の意味での豊かさを追求し、それを実感する事が出来るということ、その人なりの生き方において、満足感・充実感が得られるという

ことではないかと考えます。

その為には、自分は何をしたいのか、社会にどう貢献するのかを考える事が重要です。自分の適性や能力を考え、自身の得意分野で社会の一員としての貢献をすること、社会に置いて自身の存在意義をその人なりに得ることが満足感・充実感であり本来誰しもが持っている人間としての欲求を満たすことにつながると考えます。

社会を成長させるため一人一人が何でも行わなければならない時代は終わり、その人なりの精神的な成熟が結果として社会全体を発展させていく時代になると思います。それは極めて人間らしい本能的な行動パターンに基づいたある種「普通」のことの実現ではないでしょうか。しかしながら、誰しもの願いであることが非常に出来ずらい状態にいま国自体が追い込まれており、戦後復興の時代とは逆の、国民が一丸となって先が見えない不安な状態になっています。一刻も早くこうした状態から脱するために社会全体が変わろうとすることが重要であり、活力ある21世紀を築くための「改革」が必要であると考えます。

政治の仕組みや経済活動の見直しをはじめ、地域や家庭生活まで、至る所での改革にチャレンジしなければ、子孫の時代にまで大きなツケを残すことなるでしょう。

子供達のための未来づくり

私達は毎日一生懸命働くのは、確かに自分たちの生活を少しでも豊かにしようとするからだと思います。自分を含め家族の皆が楽しく暮らせるようにするために日々努力を続けていますし、社会全体も平和で幸せな生活環境を望んでいます。しかし、私達人間が活動を活発にすればするほど周りの環境、特に自然環境は悪くなっていきます。生活の糧を得るため働いている以上、経済活動を止めてしまう訳には当然いかないと思います。自分や家族を大切にするのは人間として当たり前ですが、その大切にする気持ちの少しでも自分や家族以外の地域や社会全体に振り向ければ、少しは違ってくると思います。

人間は、高度な知恵を持ったために、自然の中の他の動物と一線を画し、その欲を満たすために自然の摂理に反して勝手なことをして来ました。もうそろそろ過度な成長に終止符を打ち、立ち止まって周囲をよく見渡す時がやって来たように思えます。

誰もが今の日本を含め全世界の不幸や異常な出来事のない21世紀を望んでいます。

そうした心豊かな未来を築くためには、一人一人が自分の足で立って、自分の力で歩んで行こうと努力することが必要だと思います。ただ、その時一人で無理せず、社会全体で少しずつ力と知恵を出し合うことが大切だと思います。一人で出来ないことも多くの力を結集すれば少しずつ前に向かって進んでいけると思います。進む先には未来の子供達の笑顔が待っています。

本来人間が持つ素直な気持ちや思いやり、誰しもが願う自然で普通の事柄や価値観が失われつつある今、大自然の変化は大きな警告となって自分達に降りかかってきているように思います。

明確な「普通」を計る物差しはありません。しかし、21世紀に生きる子供達のために、あえて普通のことを私達大人はチャレンジし今の考え方や生き方を「改革」し、社会全体ですばらしい環境を築く必要であると思います。そしてこれを次世代へと引き継がなければならないと考えます。

終わりにあたり、今私達は輝かしい21世紀のスタートに立っています。希望の持てる夢ある時代にしなければなりません。その為にもポジティブな明るい話を本来私自身述べたい部分もありましたが、あえて現実を直視するがゆえに多少ネガティブな内容になりましたことを心よりお詫び申し上げ、お付き合い頂いたことに感謝し私が願う21世紀を締め括ります。